

I 調査の概要

岩田 憲二（石川県白山自然保護センター）

1. 調査の目的と方法

白山麓の焼畑については、これまで主として人文地理学や民俗学といった人文科学分野からの調査研究が行われ、自然科学分野からの成果は前者ほど挙げられていなかったのが現状である。焼畑が消滅寸前の状態にあることも考え合わせ、植生・昆虫・土壌といった観点から焼畑の実態を早急に調査し、自然科学の立場から焼畑の特徴を明らかにすることが必要である。このことにより、実際に焼畑を行っている所、あるいは過去に焼畑が行われた所がどのような自然環境下にあるかが解明できるものと思われる。本調査では、以上の様な自然科学分野から焼畑を調査し、その特性を解明することを目的とする。

調査の方法は、約40年前にダム建設で水没するまで焼畑が行われてきた小松市小原の焼畑地を中心に、下記の担当者がそれぞれの分野で記録測定やデータ収集にあたった。植生調査は、焼畑地に生育する植物の方形調査と伐採後の変遷を主に調べた。土壌調査は土の成分や肥沃度を、昆虫調査は害虫-天敵関係を、そして焼畑作物調査ではヒエ作について、それぞれ調べた。

- ・昆虫／小原その他……富樫一次（石川県農業短期大学）
- ・土壌／小原……長谷川和久（石川県農業短期大学）
- ・植生／小原……米山競一（石川県白山自然保護センター）
- ・焼畑作物／白山麓地域……橘 禮吉（加能民俗の会）
- ・焼畑現場指導／小原……伊藤常次郎（民俗研究家）
- ・まとめ……岩田憲二（石川県白山自然保護センター）

2. 焼畑地の概観

今回の焼畑調査は小松市小原の焼畑地を中心に調査を行った。旧小原集落は標高約300mに位置し、周辺の山地斜面（標高300-500m）を利用して焼畑を行っていた（図1）。このあたりは、植生でいえばヤブツバキクラス域の上限からブナ帯に移行する所で、山地斜面中下部の湿潤地にはミヤマカワラハンノキ・タニウツギ・イタヤカエデといった焼畑好適地を示す指標樹木が、そして乾燥気味の場所には炭の原木となるコナラが生育し、尾根筋の国有林（地元では官山と呼ぶ）にはブナが見られる。小原周辺では一般に、日照時間の長い大日川左岸（東向き斜面）は乾燥気味なのでコナラが生育し、炭焼き地域となっている。これに対して、昼頃から陽があたる右岸（西向き斜面）は湿潤気味で、ミヤマカワラハンノキ等の焼畑指標木が繁る焼畑の適地となっている。焼畑適地は「ムツシ」と呼ばれ、礫混じりの黒土がある場所は特に上質のムツシとされ、大日川右岸に散見される。こうした自然環境の中で、地元の人々は焼畑でヒエやアワを栽培して主食穀物を手に入れ、炭を焼いて現金収入を得るという生活を送ってきた。そして、人々は周辺の山から衣食住に関わる生活必需物資を入手し、生活の支えとした。こうした生活は、約40年前にダム建設に伴う水没により廃村するまで続いた。その後、小原周辺の山林はそれほど利用されることなく放置されてきたが、近年、焼畑が再開された。

小原出身の伊藤常次郎氏は昭和52年より故郷の山で焼畑を復元し、伝統的な手法に則った方法

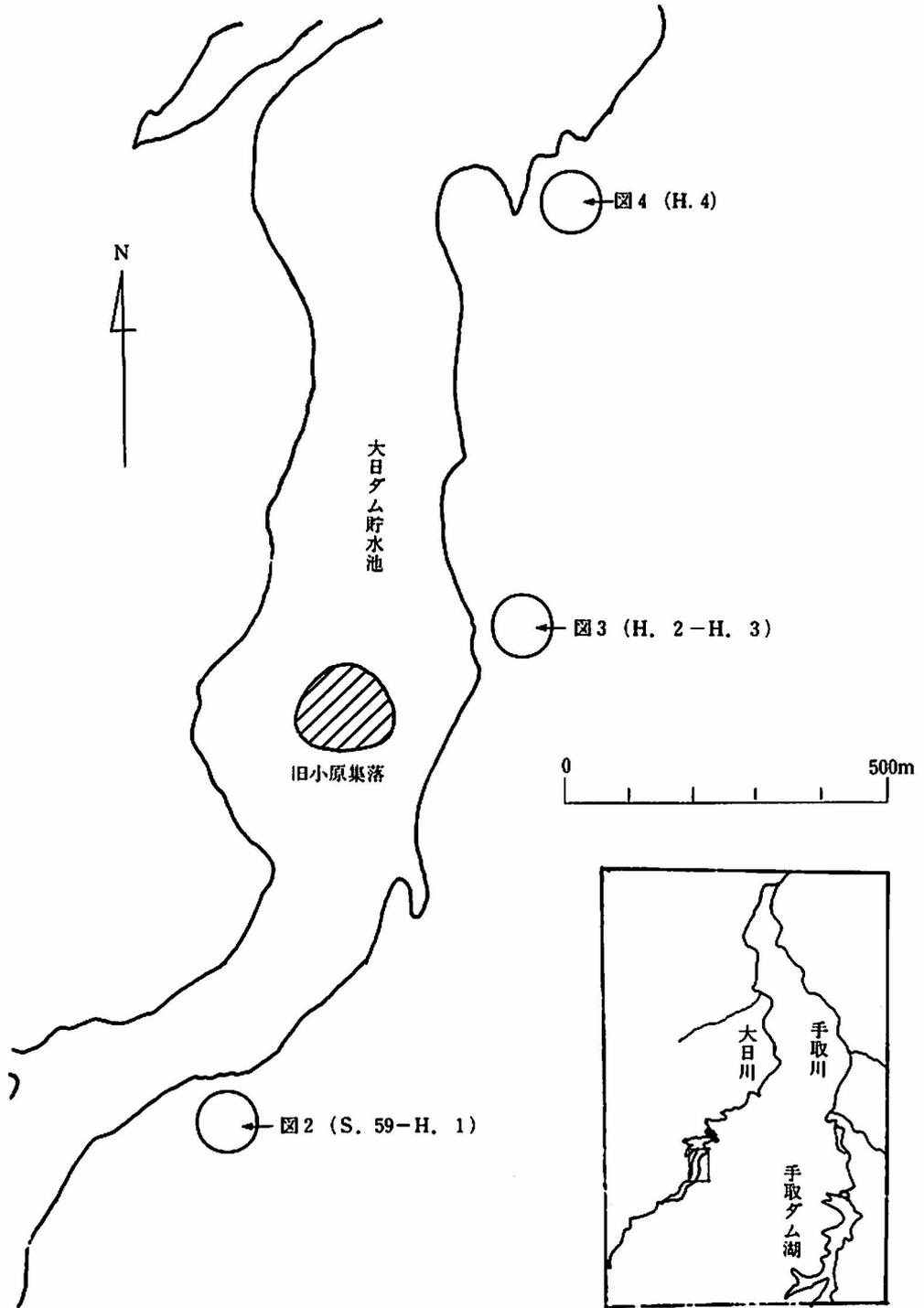
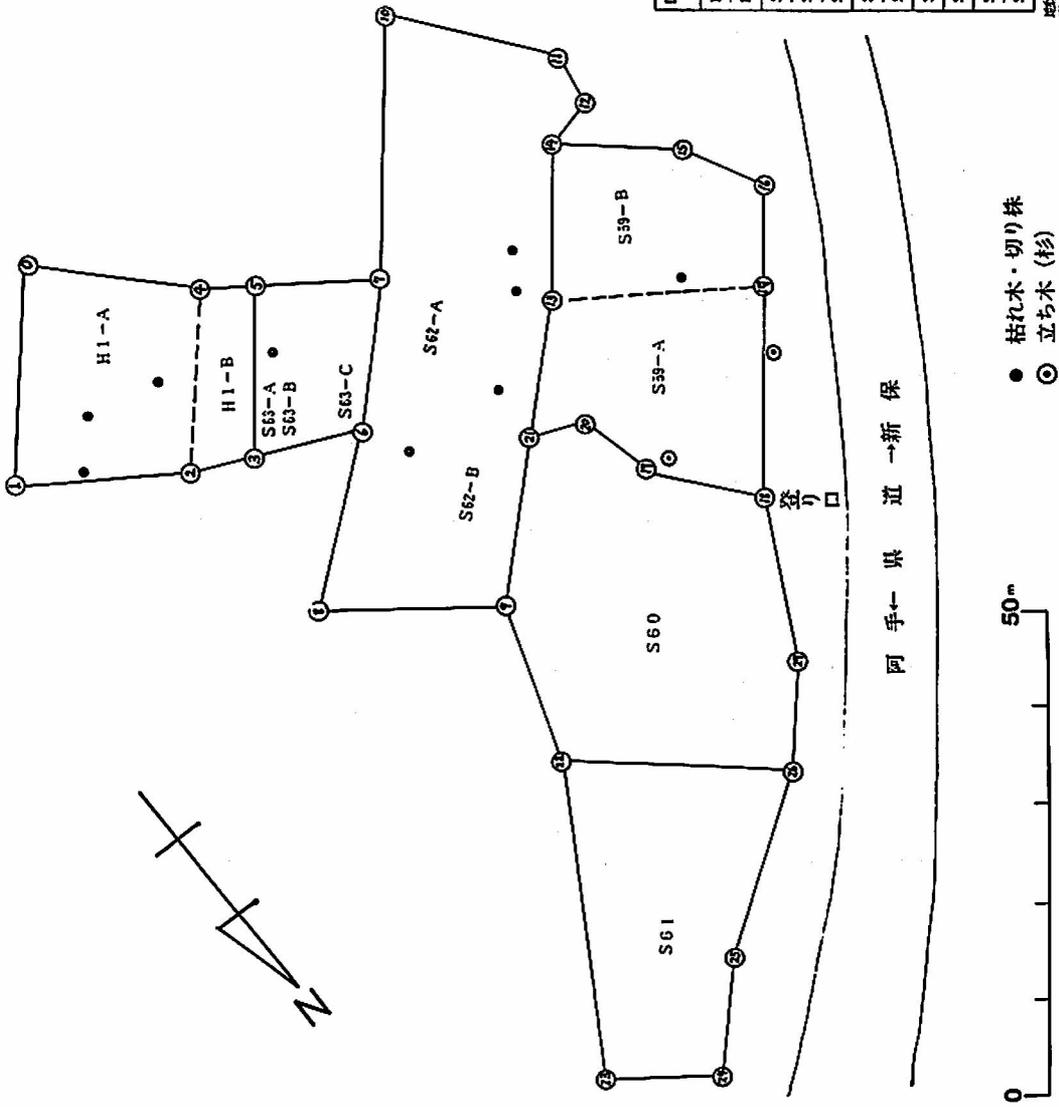


図1 小松市小原の焼畑地



小規模区に於ける地産の状況 (昭和59年～平成元年火入れ)

区 画 名	火入れ の年	区画 の年	区画 の年	調査年	調査年 の年
H1-A	平成元年	1年	アウ	アウ	平成元年
H1-B	平成元年	2年	アウ→アスキ	アウ→アスキ	平成2年
S63-A	昭和63	1年	ゾクホヒエ	ゾクホヒエ	昭和63年
S63-B	昭和63	1年	ゾクホヒエ	ゾクホヒエ	昭和63年
S63-C	昭和63	1年	モチアウ	モチアウ	昭和63年
S62-A	昭和62	3年	モチアウ→アスキ	モチアウ→アスキ	平成元年
S62-B	昭和62	3年	ネコウ→アスキ	ネコウ→アスキ	平成元年
S61	昭和61	1年	ヒエ	ヒエ	昭和61年
S60	昭和60	3年	ヒエ→アウ→アスキ	ヒエ→アウ→アスキ	昭和62年
S59-A	昭和59	5年	アウ→アウ→アウ	アウ→アウ→アウ	昭和63年
S59-B	昭和59	5年	アウ→アウ→アウ	アウ→アウ→アウ	昭和63年

調査場所：白山自然観察センター (平成4年4月8日実施)
 調査者：伊藤誠文彦

図2 焼畑入れ地I

で焼畑の技術を保存してきた。現在70才の伊藤氏は、激しい労働を要する焼畑を今後も続けるのは難しく、今回の調査のため平成4年に行った焼畑が最後の火入れとなった。この調査では、昭和50年代から今まで伊藤氏が焼いてきた焼畑跡地および、調査時点で実際に焼畑を行っていた畑地を中心に調べた。

図2は、昭和59年から平成元年までの小原における伊藤さんの焼畑地の変遷の概要を、現地測量に基づいて図示したものである。この辺りは標高350-400mの間の山地斜面で、前記の通りミヤマカワラハンノキ等の焼畑適地を示す樹木が焼畑地の周辺にみられるが、焼畑放棄地はススキや雑草が繁っている。

伊藤さんはこの地でアワとアズキの栽培を中心に一つの焼畑地を1~5年間利用した。焼畑で栽培したアワ（モチアワ）とアズキを原料としたアワ餅は大変美味で、そのことが、伊藤さんがこれらを栽培する誘因となっていて、焼畑再開後もモチアワとアズキをよく栽培した。しかし、焼畑で生計を維持していた40年以上前までのかつての小原では、一つのムツシを6年間（ヒエ→アワ→ダイズ→アズキ→ヒエ→シコクビエ）利用し、その後20~30年間休閑して地力を回復させてから再び焼畑に利用するという、6年周期の利用法が一般的であった。6年間の焼畑利用が終わった後も、その跡地には4-5年間、食用可能な野生有用植物が生育し、かつては小原の人達の食生活に役立った。こうした状況は今も同じで、図-2の中の焼畑を終えて放棄された跡地には、ウド・フキ・ワラビ・カタクリ・ヤマノイモ・アサツキ等の山菜類や、アケビ・クワ・イチゴ類の果実がよく生育している。

図3は、平成2-3年度に火入れした焼畑地で、この時は焼畑の技術保存活動を行っている里山トラストのメンバーが伊藤氏と共に火入れを行った。図2と同じく、小原地内の大日川右岸の山地斜面に位置し、通称「高ん下」とよばれる場所である。「高ん下」で作付けしたのは標高354m-382mの山地斜面で、傾斜は25度-35度の急峻地である。栽培年次と作物では、まず火入れ初年（平成2年）には、図中の斜面中部及び右端に火入れしてアワ（モチ・ウルチ）を栽培し、2年目（平成3年）にはダイズ・アズキ・ソバ・ダイコンを栽培した。図3の左端の部分は、平成3年の火入れ初年にアワ（モチ・ウルチ）とヒエを、2年目の平成4年にはアズキを栽培した。ちなみに、平成2・3年に「高ん下」で栽培したアワの反当収量は平均146.25kg（里山トラスト／西村氏データ）で、アワの実の重量945g/升（伊藤氏データ）と合わせて考えると、1.55石/反という値が得られた。

図4は、平成4年度に伊藤氏が火入れをしたムツシ（通称「シロベエ」）で、アワとヒエを栽培した。ここは道路下の法面になっていて、昭和20年代までは焼畑や炭焼きに従事する居住者が居た。焼畑の伐採前は、ミヤマカワラハンノキやタニウツギが繁る低木林となっていた。

参 考 文 献

西村恵二（1992） ナギ畑日記、里山トラストニュース7号、p.9-12

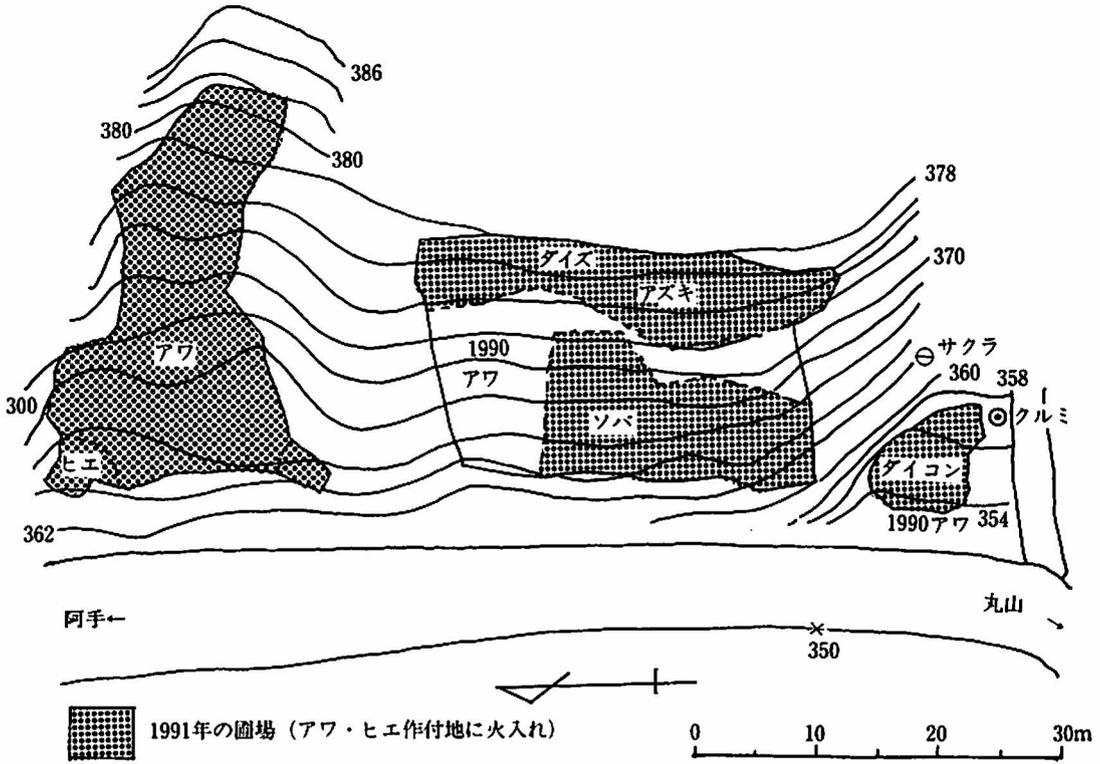


図3 焼畑火入れ地2 (高ん下) 作成: 里山トラスト, 西村他

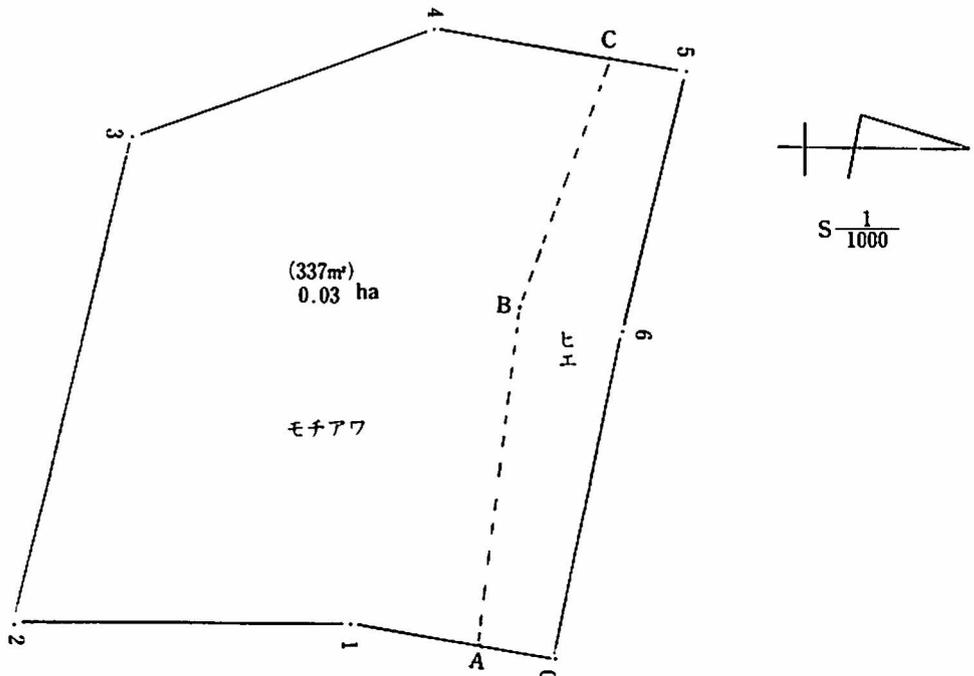


図4 焼畑火入れ地3 (シロベエ)